

山村における地域女性の起業活動の実態と課題

— 四万十町十和おかみさん市を事例として —

林あかね・土屋俊幸（東農工大院農）

要旨：山村振興に向けた活動として、近年地域女性による起業活動が注目されている。活動は、女性の自立や家庭での地位向上、起業グループ同士の地域間交流による新たなつながり形成等の役割を果たしていると指摘されているが、48の女性起業グループで構成された「四万十町十和おかみさん市」が存在する高知県四万十町十和地区では、複数のグループの存在が地域に様々な効果を与えていた。具体的には、地域女性の多くが活動することで地域公認の活動になり、女性自身がより活動しやすい環境が作られたことや、Iターン者には地域に溶け込むきっかけとなったこと、また、グループ間で意識し合うことによる活動促進やアイデア創出に加え、普段からグループとして連携が取れていることで集落行事の手伝いの際にも活動しやすく、集落の機能を維持する役割を果たしていることなどが挙げられる。しかし、性格の異なるグループが複数存在することで「おかみさん市」全体の方針が定まらないという問題もあることから、今後も活動を継続するためには、活動内容や価値観にみられるメンバー間の多様性の利点と欠点を考慮し、潤滑な組織運営のために活動範囲の見直しが必要であると考えられる。

キーワード：女性起業、山村、地域づくり、直売、四万十町十和おかみさん市

I 背景と目的

日本の山村において地域社会の衰退が見られる。衰退を食い止め、より住みやすい地域を目指して様々な取組みが全国で行われているが、過疎・高齢化の進む現在、活動の担い手を確保することが重要な課題である。この担い手として、近年になって地域に住む女性達が注目されている(1)。彼女達の取組みの代表的なものとしては農林産物加工・直売などの起業活動が挙げられ、この活動は、経済力の獲得による女性の地位向上(5)、直売所を核とした地域住民の交流創出(2)、活動を介した地域外の他団体とのつながり形成(4)など、経済的利益だけでなく様々な役割を果たしていると指摘されている。農村女性起業に関する研究は、これまで女性個人、家庭内、地域間のグループ同士に焦点を当てたものが多く、一つの町村内に複数の女性起業グループが存在する事例についての研究は少ない。また、1980年代以降急速に広まった女性起業活動は、現在メンバーの高齢化によって存続が困難な状況に直面していると言われており、そのような課題において複数の起業グループによる相互助け合いなどの可能性を考察することは、意義があると考えた。

よって本研究では、山村振興の担い手としての視点から、一町村内における複数の女性起業グループについてその実態を把握し、今後活動を続ける上での課題を考察することを目的とした。

II 課題と手法

1. 調査団体

本研究の調査対象団体として、高知県高岡郡四万十町十和地区に存在する「四万十町十和おかみさん市」(以下「おかみさん市」)を選定した。拠点を置く地区が振興山村に指定されていること、「おかみさん市」とは大枠の団体名であり、区内には「おかみさん市」に所属する48の起業グループが存在すること、農林水産祭むらづくり部門において平成17年度内閣総理大臣賞を受賞し、対外的な評価を受けている団体であることが選定の理由である。

2. 調査課題・手法

山村女性の起業活動の実態を把握するために、1)「おかみさん市」組織全体の概要、2)「おかみさん市」に所属する活動グループ、メンバーの詳細およびグループ間の関係、3)「おかみさん市」の活動が地域社会に与える影響の3つを把握することを課題とし、それぞれ文献調査とメンバー・各関係者・地域住民に対する聞き取り調査によって行った。現地調査は、2008年6月～11月に行った。なお、3)では、より具体的な地域社会への影響を把握するために、事例として十和地区内の1集落に着目した。そして最後に、課題1)～3)を踏まえ、4)山村振興の担い手としての女性起業活動を評価し、今後の課題を考察した。

III 調査地概要

「おかみさん市」の活動拠点である四万十町十和地区(旧十和村)は、県の西北部に位置し、面積は164.66km²、林野率は90.5%と高く、19の集落がある。1,269世帯3,332人が暮らし、高齢化率は37.0%

Akane HAYASHI and Toshiyuki TSUCHIYA (Grad. Sch. of Agric., Tokyo Univ. of Agric. and Technol.)

Promoting new business by women in mountain village : A case study on Simanto-machi Towa Okamisan-Ichi

で振興山村に指定されている（2005年）。また、就業者数は1,879人、農家数は692戸で、農業就業者2,211人中女性は1,140人（51.6%）である（1995年）。2006年に隣接する大正町、窪川町と合併し、四万十町となった。

IV 「四万十町十とおかみさん市」の概要

1. 組織の概要

「おかみさん市」は、旧十和村の地産地消運動を進め、活力ある地域づくりを図ることを目的として、1998年に設立された組織で、合併後の現在は、四万十町内の生産者、四万十町、株式会社四万十ドラマ（旧十和村と隣接する2町村が出資してできた第3セクターが完全民営化した企業）、高知はた農協を構成員とする（3）。2008年11月現在、201名（うち男性26名）の生産者が会員として登録している。組織の活動は主に十和地区の女性達によって行われ、活動単位として5～10名程度の活動グループを結成する。この活動グループは全部で48組あり、地区の19集落中17集落に存在している。事務局は四万十町役場十和支所の中にあり、町職員が常勤している。構成員のうち、株式会社四万十ドラマと高知はた農協は、会議のみ参加しており、実際の活動にはほとんど関わっていない。

2. 運営体制と活動の概要

「おかみさん市」の活動は、農産物出荷、食品加工、食農教育と大きく3つに分けられ、それぞれが部会という形で存在している。農産物出荷部門は「エコ部会」と言い、ISO14001を実践して育てた野菜などを地区内の道の駅や高知市内のスーパー等に出荷する。食品加工部門は「加工部会」と呼ばれ、育てた野菜やしいたけを使った加工品の製造・販売、また、道の駅や高知市内のスーパーなどでランチバイキングや餅つきなどを行う。食農教育部門は「給食部会」が担当しており、地区内の小学校へ給食の材料として野菜を出荷したり、生徒と一緒に料理を作る。会員はグループ単位で1つ以上の部会に所属する決まりになっており、グループで所属する部会に加えて個人的に他の部会に加入するメンバーも存在する。

組織全体の運営に関しては、企画会議と代表者会議という2種類の会議が毎月開かれる。全体の運営に関する事項が決定されるまでの手順は、まず、「おかみさん市」事務局と代表・副代表、各部会長、四万十ドラマで企画会議を開き、「おかみさん市」全体の運営事項について検討する。そこで検討された議題が各活動グループの代表者が集まる代表者会議で事務局から提案

されるので、代表者は議題を持ち帰ってそれぞれのグループ内で議論した後、その結論を次回の代表者会議で持ち寄って検討し合うことで最終的な決定を行うという方法を取っている。

3. 経営状況

「おかみさん市」では、2007年度の総収入5,347万円中その半分を町の補助金が占めるなど、町からの支援が非常に大きな存在となっていた。しかしこの補助金は2008年度いっぱい打ち切られており、今後活動を継続する上では経営面における改善が重要な課題となっている。

V 地域に複数のグループが存在する影響

1. 「おかみさん市」に所属する活動グループ詳細

「おかみさん市」に所属するグループの詳細を知るために、13グループの代表者19名に対して聞き取り調査をおこなった（表-1）。19名の平均年齢は57.8歳、14名が2つ以上の部会に所属しており、活動の平均頻度は月5.58回、平均年収は41.9万円である。グループ結成の背景には集落の婦人会・農協女性部・Iターン者同士・友達同士など、様々な交友関係が存在していた。

日常生活における活動の位置付けは「生きがい」や「楽しみ」など精神的側面を重視するものから、「副業として」「販売ルートのひとつ」など経済的側面に重点を置くものまでグループ間で意見が異なった。活動内容に関しても、採れた野菜を出荷するのみのエコ部会の活動と、数日の事前準備を経てイベント開催や加工品生産を行い、設備投資もそれなりに必要な加工部会の活動とでは、その性質の違いが見られるが、精神的側面を重視するメンバーはイベントなど加工部会の活動に、経済的側面を重視するメンバーは手軽なエコ部会の活動に参加する傾向が見られた。

2. 「おかみさん市」に所属するグループ間の関係

聞き取り調査によって得られた意見からは、身近で他のグループが活動していることは、相互に刺激し合うことによるやる気の向上や新商品のアイデア創出、「皆やっているから」という家族を説得するための理由付け、Iターン者が地域に溶け込むきっかけなどの良い影響を与えていることが把握できた。しかしそれと共に、性質の異なるグループをまとめる必要性等、組織の舵取りを行う中心メンバーや事務局に負担が偏るという問題も生じさせていた。

VI 女性の起業活動が地域社会に与える影響

「おかみさん市」の活動が、本人達だけでなく、周囲や地域社会にどのような影響を与えているかを把握するために、地区内の1集落に焦点を当て住民の意見を聞いた。選定にあたっては、十和地区19集落の中でも1集落に存在するグループ数が3と多く、3グループそれぞれの結成理由が異なるZ集落に焦点を当てた。

1. Z集落

人口155人(男性72 女性83), 53世帯が生活する。高齢化率は十和地区の平均とほぼ同じ36.78%である。集落の世帯の約2/3が「おかみさん市」に所属し、集落には3つの活動グループが存在する。

2. Z集落内の活動グループ詳細

(1) Z婦人会

集落の婦人会のメンバー11名で構成されるグループで、平均年齢は70歳前後である。野菜出荷やイベントを行っているが、近年高齢化により活動が停滞している。活動の位置づけとして、楽しみや生きがいを重視する傾向が強い。

(2) 五縁の会

お茶飲みが目的であった若妻会が起業活動グループに発展したもので、60歳前半の女性13名で構成される。婦人会を姑世代とすると、嫁世代のグループといえる。活動内容は主に加工品の製造・販売で、補助金も積極的に導入しており、収入源として活動を位置づけている。

(3) Z(集落名)

上記2つに入っていない住民で構成されるグループ。事務局が新規グループを募集した際に、働きに出ていて婦人会の活動に参加できない女性や、野菜を出荷したい男性が集まって作られた。男性5名、女性5名で構成される。活動は個別に野菜を出荷する程度で、余った野菜の出荷ルートなどとして「おかみさん市」を位置づけている。

3. 各グループの関係

「Z婦人会」と「五縁の会」は、活動の省力化と高齢で車が運転できないメンバーへの気配りから、運転ができる会員が交代制で野菜を共同集荷・出荷していた。また、集落行事の際には、調理配膳などの手伝いを共同で行うなどの協力関係が見られた。「Z」と他の2つのグループの間には、とりわけ関係は見られなかった。

4. Z集落住民の意識

区長経験者の男性2名に、区長・住民・家族それぞれの立場での「おかみさん市」に対する意見を聞いた。

結果、住民として普段の生活にはあまり影響はないが、家族としては妻の活動を応援しており、区長としては、集落行事などの際、「Z婦人会」と「五縁の会」の存在を頼りにしているとの声が聞かれた。

5. Z集落で「おかみさん市」が与える影響

以上より、Z集落において「おかみさん市」が存在することの影響について評価する。

まず、野菜の集荷・出荷をグループが共同で行うことによって、活動にかかる手間の省力化や高齢のメンバーも参加できる仕組みづくりなど活動を継続するための工夫が見られたこと、また、婦人会に入っていない女性は「Z」に所属するというようにグループが複数存在することで様々な境遇の女性が加入できたことなど、集落内に3つのグループが存在することで、今後高齢化が予想される中での協力・助け合いの可能性や、誰もが活動に参加できる基盤が作られたと考察できる。

集落全体においては、普段の生活の中や未加入世帯に対してはそれほど影響がないものの、集落行事の際などは、もともとグループでの信頼・協力関係があることから手伝いをするにしても連携が取りやすく、外からも声がかかりやすい状況をつくっているなど、集落機能の維持に関して重要な担い手となっていることが分かった。

VII まとめ

以上の課題より把握した「おかみさん市」の実態と「おかみさん市」が地域に与える影響を整理する。まず、複数のグループが地区内に存在することでメンバー同士が互いに意識し合い、活動の促進や新しいアイデアの創出などの機会が作られたことや、地区の女性の多くが活動に参加することによって「おかみさん市」が地域単位の活動に発展したことが挙げられる。その活動の広がりやIターン者にとっては地域に溶け込むきっかけになり、多様な境遇の女性の参画の受け皿となるだけの様々な性格のグループを誕生させた。また、普段は別々に活動するグループが協力して集落行事などの際に働き手となることで、集落の機能が維持されていることも注目すべき影響であるといえる。

しかし、このような良い影響が見られる反面、多様なグループが存在することによって生じる問題も見られた。収入は少なくとも楽しさを重視した活動を続けたいメンバーと、より効率的に収入を得たいメンバー、ともすれば正反対の性格を持つ人々が同じ船に乗っている状態で、「おかみさん市」が一つの方向性を指し示

して戦略を練ることが困難な状況にある。更に、町の補助金が打ち切られたことによって、経済的にも今までと同じように幅広く活動を続けていくことは難しくなると考えられる。

今後の課題としては、多様な活動内容やメンバーを包括する利点と欠点を考慮した上で、活動範囲を再検討することが重要であると考えられる。

謝辞

本研究を実施するにあたっては、多くの方々に多大なご支援とご協力をいただいた。とりわけ「おかみさん市」事務局・会員の皆様には、何度も聞き取り調査のために時間を割いていただいた。この場を借りて厚く感謝の意を記したい。

引用文献

- (1) 秋津元輝 (2005) 農村青年・女性の新しい動き—宿命から選択へ— (戦後日本の食料・農業・農村編集委員会, 戦後日本の食料・農業・農村第 11 巻 農村社会史, pp535, 財団法人農林統計協会, 東京.) 467-473.
- (2) 岩崎由美子 (2001) 直売所を核とした女性ネットワークの形成, 農業と経済 67(9), 116-124.
- (3) 四万十町十和おかみさん市パンフレット (2008)
- (4) 鈴木邦子 (2002) 農村女性起業と女性農業者のネットワークを通して, 農林統計調査 52(1), 27-33.
- (5) 靄恵理子 (2007) 農家女性の社会学, pp251, コモンズ, 東京.

表一 1. 「おかみさん市」グループ代表者の概要

グループ	個人	性別	年齢	活動内容				活動頻度 (月)	収入 (年)	位置づけ	グループ結成のきっかけ	備考
				野菜出荷	加工品	イベント	給食					
A	a	女	60代後半	○	◎	○	月10	約30万円	一番	生活改善グループ	加工部会長	
	b	女	50代後半	○	◎		月15くらい	約80万円	張り合い、楽しみ	集落で		
B	c	女	60代前半	○	◎		月15くらい	約80万円	張り合い、楽しみ	集落で		
	d	女	50代後半	○	◎		月15くらい	約80万円	張り合い、楽しみ	集落で		
C	e	男	40代前半	○			3,4,5月のみ	約30万円	販売ルート	「おかみさん市」の紹介	Iターン	
D	f	女	70代前半	○		◎	月3	約80万円	楽しみ	農協婦人部	給食部会長	
E	g	女	40代前半			○	現在休み中	ほとんどなし	勉強の場	アドバイザーとして	Iターン	
F	h	女	60代後半	○	◎	◎	月3	約15万円	生きがい	婦人会、農協女性部	会長	
G	i	女	50代後半	○	◎	○	月3	約10万円	楽しみ	婦人会		
	j	女	50代後半	○	◎	○	月3	約10万円	楽しみ	婦人会		
H	k	男	40代前半	○			ほとんどなし	ほとんどなし	おばちゃん達の楽しみ	有機農業ネットワーク	Iターン	
I	l	女	50代後半	○	◎		月10くらい	約60万円	張り合い、収入源	友達同士で		
J	m	女	60代後半	○		◎	月1	約10万円	楽しみ	婦人会や女性部に入って いない人同士		
K	n	女	60代前半	○		◎	月4	約50万円	一番	農協婦人部	副会長。前会長	
	o	女	70代後半	○		◎	月2	約80万円	生きがい	農協婦人部		
L	p	女	50代前半	○	◎	○	月10くらい	約90万円	サポート的なもの	若妻会		
	q	女	60代前半	○	◎	○	月10くらい	約80万円	収入の一部	若妻会		
M	r	女	30代後半	○			月1	約1万円	余った野菜の出荷	集落の婦人会や女性部に 未加入の人同士		
	s	男	60代後半	◎	○		月2	約10万円	販売ルートの一つ	集落の婦人会や女性部に 未加入の人同士		

資料：聞き取り調査による 注) 複数の活動を行っている場合、とりわけ力を入れているものに◎。